
秘密からの恋

琉兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密からの恋

【Nコード】

N3836BA

【作者名】

琉兎

【あらすじ】

一目ぼれなんてあるわけないと思ってた俺が一目ぼれした。でも、その相手と関わることなく半年が過ぎた。そんなとき、俺は彼の秘密を知ってしまう。それが彼との関係を大きく変える……。。

【夕日よ昇れ】の榊原良介と檜山滯の話。なので【夕日よ昇れ】とリンクしたところがあります。

***0*(前書き)**

これようやくリンク作品が揃いましたあ！

さらに執筆速度遅くなるかもですけど……許してください<|
>

0

その人を好きになったのは、高校生になってすぐ。入学式で、壇上の端に控えていたその姿を見たときだ。僕、檜山滯ひやまれいは前から二番目だったから、僕のところからよくその人の姿は見えた。世間的には一目惚れというんだと思う。今までそんなこと信じてなかったし、あり得ないと思ってたのに。なぜかその人から目が離せずにあった。なのに、一回もその人と視線が合うことなんかなくて。ただ、その入学式で名前は知った。

———生徒会副会長、さかきばらりようすけ榊原良介。

当時高校2年生。なのにもかかわらず副会長を務め、成績優秀な彼は、まさに生徒の手本のような人だった。僕のところからはステージの裏も少し見える位置にいたから、そこでせいと会長になにやら注意をしていたのも見えた。そしてまた真面目な顔して式の進行を見守っていた。眼鏡の奥のその凛としたまなざしは、何を映してるんだろう。何が好きで、何が嫌いなんだろう。好きな人とか居るんだろうか。なんてことを式の間中考えていた。

でも、それ以降あの人に近づけることもなく、半年がたとうとしていた時だった。僕は偶然、彼の秘密を知ってしまった。しかもそれを知ったことをその場で彼にも知られ、他言するなと注意していった。悲しいことに、それが彼との初めての会話だった。その後も、彼は何かと僕に構うようになったけど、それはおそらく秘密をばらされないように監視するため。恋愛感情なんか彼にはない。だったら———僕が好きにさせればいい。そう思ったその日から、僕は彼を良と呼ぶようになった。

***1* (前書き)**

第一話です。

基本、滞視点です。

1

2年生の春がやってきた。相変わらず、変化も何もない朝。いつも抱いて寝ているテディベアをわきに抱えて、洗面所に向かい顔を洗う。テディベアをソファに置くと冷凍食品のパンをレンジで温める。大体自炊なんかしない。というかできない。テレビをつけて、朝のニュースを見る。といっても聞き流すだけ。要は部屋が静まっていなければならない。ほかほかの温まったパンを加えながら、カップにミルクを注ぐ。

食事を済ませて、制服に着替える。Yシャツを着てその上にクリム色のセーターを着る。ネクタイはあえてしていない。してなくてもそれほど注意をされないのは校則の緩さのおかげだと思う。その上にブレザーをはおって、洗面所に再び向かう。簡単に櫛で地毛の茶髪の髪の毛を梳かす。といっても、僕の髪の毛は癖毛だからどうしてもぼさぼさしてしまう。まあ、それも仕方がないことだからそれ以上の抵抗はしない。再びリビングに行き、テディベアの横に置いてあるイヤホンに首をかけ、プレイヤーをブレザーのポケットに入れる。さらに通学用のかばんを持てば準備完了だ。

「行ってきます……」

ぼふぼふとテディベアに別れを告げ、僕は寮の部屋を出た。ちなみに、僕は一人で寮の部屋を使っている。これも実は良のせい。同室生に秘密をばらされるのを防ぐためらしい。何とも用意周到だし、そこまで僕の事を信用してないのかと悲しくもある。イヤホンを耳に当て、僕は学校の校舎へと向かった。

教室に入っても、誰ひとり僕に声をかけてくる人はいない。僕が誰も寄せ付けない、そんな雰囲気を出しているからだ、前誰かに

言われた気がする。とくにクールを気取っているわけじゃないけど、
どうやらそう思われているらしい。だから別に僕の方からも声をかけようとはしない。窓側の一番前の席が僕の席。鞆を机の横にかけてイヤホンをしたまま机に伏せる。どうせ今日も、何事もなく過ぎてくんだろうな。今日は何回会えるかな。今日は何回話せるかな。今日は何回あの人の目に映ることができるかな。そんなことを考えてしまうのは、もう日常茶飯事だった。

「お、滞じゃん。どこいくんだ？」

昼休み、昼食も食べた後教室を出たところで青葉淳にあった。同じ二年で生徒会書記をしている。数少ない僕が話す人。僕に話しかけてくる人。イヤホンをしていてもその声はよく聞こえた。イヤホンを外しつつ、そのほうに振り向く。

「保健室、サボろうと思って。どうせ良にあえないし。教室いても暇」

「副会長なら会いに行けばいるんじゃない？」

「いい。じゃあね」

「暇なら今から体育館でバスケやんだけど来ないか？」

「……バスケ？」

「そ、暇なんだろう？」

「……仕方ないから行く」

「素直じゃねーの」

別に、スポーツは嫌いじゃないだけ。体動かしてるといろいろ考えなくて楽だし、もともと運動神経は悪くない。ただそれだけ。ただ無関心で、あまり熱中できないから部活には入ってない。そういうえば、良は何かスポーツ得意なんだろうか。あまりそういう話はないからよくわからない。誕生日すら……知らないかもしれない。

今度聞いてみようか。けど、教えてくれるかな。まだまだ知らないこと多い。だから知りたい。秘密なんかより、良自身のこといっぱい知りたいのに、良は教えてくれない。あまり自分の事を話したりするのが好きじゃないみたいだし。知りたい。好きだから、知りたい。少しでも近付きたい。

「滞―？どうかしたのかよ」

「あ……なんでもない、やろう」

だめだ。良の事考えると、周りが見えなくなる。

***1* (後書き)**

澪はどこかで書いた気もしますが素直じゃない寂しがりやなイメー
ジです。ツンデレかも。

***2* (前書き)**

すみません、滯の一人称が俺になってました。

正しくは僕の方です。

今までの話はすべて直しました。

混乱を招くような間違いして申し訳ありません。

2

この学園には4つも体育館がある。あれ、4棟かな。ま、いいや。青葉がバスケットを言うと、言ってきたのはそのうちのひとつ。体育館に着くと見覚えのある2年の奴らがいた。名前は……知らないけど。揃いも揃って背の高い奴らだ。かという僕はそれほど低くは無いと思う。一応平均身長は越しているはず。

二組のチームに別れて試合開始。青葉とは同じチームになった。少し狡くないか。青葉はバスケットだし、僕も下手じゃないと思う。勝つ気満々だな。遊びでも負けるのは嫌らしい。僕は別にどっちでもいいんだけどさ。

「滞！」

「はいよ……今はバスケットに集中、集中」

青葉からのパスは的確で、すんなり僕のほうに飛び込んできた。すぐにゴールに向かって、ドリブルで突き進む。途中2・3人のディフェンスをかわし、シュートを放った。弧を描いてそれは見事にゴールネットに吸い込まれていった。

「ナイス！さっすがだな！やっぱりバスケット部入れよ」

「無理」

「この調子でもう一丁！」

「うん……」

すんなり相手からボールを奪った青葉に促されて、僕はゴールへと走る。そのとき、ふと体育館の入口にいる人物が目に入った。僕の動きがピタッと止まる。なんでこんなところにいるの……。

「漣!」

「え……痛っ!!」

気を取られていたら、頭にボールが振ってきた。あまりの痛さに、思わず頭を抱えてしゃがみこむ。どうやら青葉がパスを出していたらしい。でもそれに気がつかなかったのは、あのとき見えた人。間違いない、あれは良だ。しっかりとこっちを見ていた。なんで、なんでこんなところにいるの? なんでぼくのほうを見てたの。ここに何しに……。そう思い、再びそのほうを見たけど、もう良の姿はなかった。

「漣? 大丈夫か?」

「うん、ごめん。よそ見してた」

「なんかあったのか?」

「……ううん。ごめん、やっぱり保健室で寝てる」

「おう、またな」

「うん」

一人体育館から校舎に向かう。少しボールがあたったところはずきずきしている。早くベットで寝たいのに、なんでこの学園は無駄に広いんだろう。保健室までの道のりが長い。なんで並木道なんかあるかないといけないんだろう。体育館で怪我したら大変じゃないのか。ふと、その並木道の木々の間に、人影を見つけて再び僕の動きは止まってしまった。その人影は良だ。木々の間に隠れるようにして、そこで電話をしている。けど、僕は再び保健室に向かって歩き出した。誰と電話してるのとか、なんでそんなとどことか、知らないほうがいい。知らないほうがよかったのかもしれない。隠れてやるからにはそれなりの理由があって、良の一番の秘密。それを僕は知ってしまったんだ。あの日、ちょうどさっきみたいに電話して

る良の会話を聞いてしまった。

ようやく、保健室にたどり着く。保健室に入ると保健の先生がいた。名前は知らない。保健の先生でいいじゃない。一応念のために頭を冷やす氷を貰って、なぜか6つつくらいあるベットのうちの一つにもぐりこんだ。少しお日様のおいがするベットの中で、僕は白い天井を見つめていた。

***2* (後書き)**

早く良と絡んでほしいんですが、滞がそうはしてくれないので……
徐々に徐々にですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3836ba/>

秘密からの恋

2012年1月12日21時54分発行